

初等教育における身体表現活動をめぐる一考察

－上越及び兵庫教育大学附属小学校の実践から－

時 得 紀 子*・金子 謙太郎**・飯 村 諭 吉***

(平成27年9月7日受付；平成27年12月10日受理)

要 旨

上越教育大学附属小では、1979年から異学年交流を重視した全校音楽集会在が継続され、学級毎の創作ダンスや縦割り学年で構成されるグループ活動の随所に身体表現活動を導入してきた。この学校伝統行事を通じて、入学時から5か年間で、多様なダンスによる表現活動の体験を積み重ねてきた6年1組の児童は今年度、春の公開授業でのダンス発表をめざして、「音楽を体で感じること～ストリートダンス～」の単元活動に取り組んだ。

一方、兵庫教育大学附属小学校では、1995年から子どもによる創作ミュージカルの上演を継続し、20周年を迎える。同小学校でも、異学年交流を重視した縦割り学年による大規模なグループ活動を伝統としてきた。今年度、最高学年としてリーダーの役割を担う6年3組の児童は、秋のミュージカル上演に向けて、観客に伝わるダンスを探究した。

学校伝統行事として、長年に渡ってダンスを主体とした表現活動に取り組んできたこの両小学校に、本研究の一環としてニューヨークで活躍するプロのダンサーを迎え、児童へのダンス体験のワークショップと講演、さらには受講後のクラスディスカッション、記述式アンケート調査を実施した。その結果児童らは、本番に向けた技能を高めるための努力や工夫、メッセージの伝え方、パフォーマンスの創り方と共に、仲間とのかかわり方や生き方についてなど、表現技能の向上のみにとどまらない、仲間とのかかわり等、幅広い気付きを得ていることが明らかとなった。

KEY WORDS

Physical Expression Activities 身体表現活動 Dance Performance ダンスパフォーマンス
Traditional School Event 学校伝統行事

1 研究の背景

1. 1 表現活動の充足を求めて

今日、アジア諸国において音楽科が単独で存在するのは日本を含めマレーシアなどごくわずかとなり、教科の統合が急速に進められている⁽¹⁾。学校教育に新たに導入される教科がある一方で、教科過密化などに伴い既存の教科が見直され再編統合がなされる潮流の中で、芸術教科の授業時数の確保は今や危機的な状況に置かれている。

翻って我が国では、小学校週平均1.3時間、中学校週平均1時間という極めて限られた授業時数ながら、音楽科の単独での教科存続が保たれている。しかしながら、児童・生徒に十分な音楽の学び、表現活動の機会を保障することは依然として極めて困難な状況にあると言わざるを得ない。

こうした現状の中、学校教育において音楽を活用した幅広い表現活動の機会そのものを増やしていくことは、喫緊の課題である。筆者らは、その実現に際して、歌唱、器楽といった音楽学習に比重を置く活動のみならず、音楽を感受して身体で表現するダンスによる表現活動などにも機会を広げていくことの意義をこれまでの実践的研究を通じ、その成果を発信してきた⁽²⁾。言語のみならずや身体を通じて創作をする過程でダンスは子どものノンバーバルコミュニケーション力をも育み、さらには音楽のさまざまな要素を全身で体得することにも資する⁽³⁾。本稿では、身体表現活動によってもたらされる有効性や課題について、2校の小学校を対象とした実践に基づき、児童へのアンケート調査などを手がかりとして、さらに考察を進めるものである。

1. 2 学習指導要領「体育科」に見られる身体表現活動にかかわる記述

現代の子どもたちはテレビなどのメディアを通じて、幼少時から多様なジャンルの音楽に親しむことができる環境にある。加えてインターネットの普及と共に、動画を通じて多様な音楽と共に幅広いジャンルのダンス映像に触れる機会も、ひと昔前に比べて格段に増えた。さらに3年前からは我が国の教育テレビで、ヒップホップのダンス基礎を

*芸術・体育教育学系 **上越教育大学附属小学校 ***上越教育大学（修士課程）

学ぶための番組が長期間のシリーズで放映されている¹⁾。

翻って、学校教育においても学校行事に位置付けられる全校集会や体育祭などの場で、ダンスを取り入れる動きが近年さらに活発化している。その動向は学習指導要領にも顕著に表れている。例えば小学校「体育科」では、平成20年3月の学習指導要領改訂により、23年度から「表現リズム遊び」「表現運動」の領域において、リズム遊び・リズムダンスなどの活動が導入された。さらなる具体的な表記としては、低学年において「F 表現リズム遊び」が新設された他、高学年では「即興的な表現」や、「音楽に合わせて簡単なステップや動きで踊ること」などが具体的に明示され、音楽を聴きとって瞬時に動きを創り出す活動が重視されており、ここでも創造的な身体表現に向けた改革が打ち出されたことが読み取れる⁴⁾。

特筆すべきは、中学校保健体育科の学習指導要領解説書におけるダンスの項目で、実に16ページにも及んで多様な活動の展開が提示されたことであろう⁵⁾。このように中学校では平成24年度から、そして高等学校でも、続く平成25年度から、保健体育科の「ダンス」の領域において、「現代的なリズムのダンス」など多様なダンスの活動の実践が示され⁶⁾、ダンスが必修化されることとなった。

1. 3 学習指導要領「音楽科」に見られる身体表現活動にかかわる記述

我が国が学習指導要領に示された先述したダンス必修化の背景には、ダンスパフォーマンスの技能の向上をめざすこと以上に、子どもたちに集団での活動を通じて、発表や交流・発表や交流をする(小学校)・動きを見せ合って交流する・簡単なまとまりを付けて発表し見せ合う(中学校)などの記述⁷⁾からも、コラボレーション、コミュニケーションの力を培うことが示唆されている。

こうした集団での表現活動においては、音楽科も体育科と同じ活動が実践されるため、「音楽に合わせて」や「音楽を聴きとって」という体育科の提示は、まさに音楽科の活動と一致するものといえよう。

体育科のダンスの導入が明確に示された時期、音楽科においても、現行の指導要領に改定された際に身体表現活動を広範囲な音楽活動に導入する方向の新たな提言がなされた。

平成21年4月小学校学習指導要領(音楽科)の改訂と共に、[共通事項]という新たな項目が盛り込まれ、表現活動そして鑑賞活動のいずれにも共通する内容が明示された。そして、「各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては、音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽とかかわることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること⁸⁾」が示されるなど、幅広く体をつかった表現活動の探究が促され、身体感覚を通じた活動がこれまで以上に重視される方向に転じている。

本稿ではこうした現行の学習指導要領を踏まえ、伝統的に身体表現活動に取り組んできた2つの附属小学校に焦点をあて、現代的なリズムのダンスパフォーマンスをめぐる実践的な考察を行う。折しも21世紀型の学習として、アクティブラーニングが一層強く提唱されている。子どもが、プロフェッショナルな表現者から実際の指導を体験したり、本物を目の当たりにして、その人となりから学ぶことで、身体表現活動にどのような意識の変化、表現への取り組みへの探究やその姿勢がもたらされるかについて、本稿では論考を試みる。

2 上越教育大学附属小学校「ストリートダンス」の実践から

2. 1 学校伝統行事「音楽集会」と6年生の役割

上越教育大学附属小学校(以降、上越附属小とする)では、1979年から異学年交流を重視した全校音楽集会を継続してきた。その際に全校合唱、全校ダンスに加え、学級毎の創作ダンスや縦割り学年で構成されるグループ活動の随所に身体表現活動が取り入れられてきた⁹⁾。

全校児童、教職員が一体となって取り組む、春・初夏・夏・秋・冬の年5回の音楽集会の中でも、とりわけ全国からの参観者を招いた研究会での公開となる「夏の音楽集会」は、3か月もの準備を費やす本格的な舞台制作となっている。音楽集会では、異学年交流の音楽あそび、高学年によって振付がなされる全校ダンス、6学年までの各クラス1分間の舞台パフォーマンスの創作等を通じて、高学年は下級生をリードする役割が期待される。それゆえに6年生にとって夏の音楽集会に向けたダンスの活動では、必然的に表現を探究する意識も一段と高まっていく。

2. 2 6年1組「ストリートダンス」の実践

音楽集会活動後には諸教科の学びと同様、振り返りの話し合い活動及び記述による振り返りの活動が行われる。2015年度の春の研究会の、6年1組の生「心の活動」(道徳)の公開授業では、最高学年として多くの時間を費やし

準備を進めてきた、音楽集会での舞台を振り返りながら、クラスの仲間と価値を共有したり、共感し合う子どもの姿が見られた。

上越附属小では、全6学年の各クラス（1組及び2組）がそれぞれの独自のテーマをもとに年間の計画を立てて、学年単位ではなく、クラス単位での年間活動計画が構想され、実践される。

今年度、6年1組では実践体育科として、1年間に192モジュール（以降Mとする。1Mは、30分で構成される）のうち、通年で51Mもの時間を「ストリートダンス」に充当しており、1年間を通じて他のどのスポーツよりも時間をかけた活動に取り組む構想である。

この6年1組は、今年6月24日の公開研究会において実践体育科「ストリートダンス」として、EXILEによる楽曲、「Rising Sun」のクラス全員による群舞を披露した。体育館を会場とした公開研究授業は、授業協力者である地元のダンス教室主宰の酒井さんの指導による全6回の活動の最終回にも相当した。

本単元活動のめあてとして、クラス担任である筆者は、子どもが実践体育科「ストリートダンス」の活動を通して、実践教科活動や創造活動、実践道徳にも関連させながら、「学校生活の中核をつくり、生きていく原動力を高めていく」ことを目標に掲げた。

また、公開授業における本時の目当てとして、「ダンスをすることを通して、心と体をひらきながら、仲間や酒井さんと交流するよろこびを感じたり、観客のリアクションを楽しんだりする。」と設定した⁽¹⁰⁾。

6月24日の公開研究会までの6年1組の活動のプロセスでは、実践体育科のダンス活動を通じて実践的なダンスによる表現を探究すると共に、「心の活動」（道徳活動）の一環として、新たな授業協力者として、後述するニューヨークで活躍するダンサーによる実技指導からダンスの技能を学んだり、生き方についても学ぶ機会を盛り込んできた。卓越した技能をもつ授業協力者のダンス指導や経験談、「ストリートアスリート」の単元と並行して、公開研究会において披露される音楽集会の場で発表するクラス全員によるダンスパフォーマンスの共に舞台制作に向け、話し合い活動や、振り返りの記述を継続してきた。

実践体育科の活動と並行して、子どもたちは、「音楽を体で感じること～ストリートダンス～」と題された音楽科の学習にも取り組んだ。この音楽科授業における活動では、ダンス鑑賞する、振付けを覚える、振付けを考える、仲間と合わせる、発表する、よりよい表現方法を工夫する、といった学習を音楽専科教員のもとに積み重ねてきた⁽¹¹⁾。

3 兵庫教育大学附属小学校「うれしのカーニバル」の実践から

3. 1 うれしの総合活動について⁽¹²⁾

兵庫教育大学附属小学校（以降、兵庫附属小とする）の教育目標は「人間として生きぬく力」である。その理念に立って先駆的に実践されたのが総合的な学習であり、現在行っている「うれしの総合活動」の源流となっている。兵庫附属小の独自の活動である「うれしの総合活動」は、開校以来30年のあゆみを経て取り組んできた。ミュージカル学習や学年総合など、活動内容や方法は少しずつ時代に合わせて変化してきているものの、脈々と受け継がれてきた。

「子どもたちの生活に根ざし、子どもの側からの文化の創造を大切にする」といった精神を大切にしている。そこには、「うれしの総合活動」のあり方について、常に意味や価値を問い直し、子どもたちにとって大切な活動となるように議論してきた兵庫附属の教員の姿がある。今年度も本校の教育目標と「うれしの総合活動」の意味や価値をふまえながら、「今の時代だからこそ、子どもたちにとって意味のある活動を創り上げていきたい」という願いのもと、今年度も実践を進めている。

3. 2 「うれしのカーニバル」におけるミュージカルづくり

学校所在地の名である「嬉野」から命名された「うれしのカーニバル」は、兵庫附属小開学5年後にあたる1995年に始められ、児童による創作ミュージカルを継続し、今年度9月で20年目を迎える。野外のグラウンドという巨大なスペースで、体育祭の催しの一環として発表され、縦割り学年の構成メンバーによる創作活動を伝統としてきた。

筆者は16年前の1999年に兵庫附属小を訪れ、教育音楽小学版「別冊」の音楽劇特集において、「うれしのカーニバル」（体育祭）の中で上演される創作ミュージカルの壮大なスケールと演じる児童の迫力に感嘆したことを論説している⁽¹³⁾。

秋の本番に向けてダンスの衣装や振り付けにもメッセージを込め、6年生はミュージカルの創作ダンス活動を進めている。「かかわる力」「ささえる力」「あrawす力」の3つの指標をかかげて、表現の力とともにかかわる、ささえ

るといった人との関係を築き合う学びもめざされていることが、図1からも読み取れる。

「集団表現活動領域」の単元である「ミュージカルをつくろう」は、3年生～6年生の縦割り集団で行う活動である。その活動の中には、国語の力を必要とする「お話」の紹介、「脚本」の創作、音声や表情による表現、体育の力を必要とするダンスやパントマイムなどの身体表現、さらには、音楽や図画工作における創作や表現の力が動員される。また、そのプロセスでは、社会科や理科や生活科、道徳で培う「見方、考え方、表し方」も反映される。このように、演劇的表現は総合芸術であるために、各教科・領域との密接な関係が大切になってくる。子どもと教師はそれを意識しながら、それぞれの学年の発達に照らし合わせた「ミュージカルづくり」における役割を果たしていく。そして、各組が一体となって表現を追求し、その成果の場面では、表現者としてだけでなく、鑑賞者としても表現を楽しめるようになることをめざしている。

兵庫附属小ではこの取り組みにおいて、自立、共生、創造、にかかわる下記の3つの目標を掲げている⁽¹⁴⁾。

- 自分たちの願いや思いを伝えるミュージカルづくりに夢中になって取り組み、よりよい表現を追求する。(自立)
- 学年を超えた仲間と交流する中で、様々な葛藤や貢献感、達成感を体験し、自分たちならではのミュージカルを創り上げていく。(共生)
- 鑑賞者を意識した表現づくりを通して、表現者・鑑賞者両方の目をもつ。(創造)

	3年生	4・5年生	6年生
か か わ る 力	○ミュージカルのお話を理解すると共に、イメージされる世界にひたりながら夢中になって取り組む。	○イメージしたことをもとに、自他の表現のよさを生かしながら自分にできる表現を高めていく。	○自分たちならではのミュージカルをつくろうとオリジナルの表現を追求していく。
さ さ え る 力	○同学年の仲間のよさやがんばりを認め、励まし合っていく。 ○上学年からの助言や励ましに応え、精一杯活動する。	○ミュージカルをともにつくっていく仲間のよさや頑張りを認め、自分に生かせることを見つけて活動する。 ○自分の思いを高めながら、仲間からの助言や励ましに応え、よりよい表現を追求する。	○難しい課題や局面を仲間と協力しながら乗り越えたり、他者との衝突や葛藤を解決したりできるよう活動する。 ○下学年のよさや頑張りを認め、賞賛や励ましを惜しまず、リーダーシップを発揮しながら活動する。
あ ら わ す 力	○お話や曲の感じから様々なイメージを広げ、想像の世界を楽しむ。 ○お話や曲の感じに合わせてポーズや動きをつくったり、衣装や造形物をつくったりすることを楽しむ。	○お話の内容や曲のイメージを感じ取り、そこから自分が表したりイメージを広げたり、よりよいものへ高めたりする。 ○ミュージカルへの思いやテーマを踏まえ、表現したいことを決めてお話や歌、衣装、造形物をつくったり、動きを工夫したりすることに精一杯取り組む。	○お話や曲の感じにぴったり合うイメージを求め、仲間とすり合わせながら新たなイメージを創造する。 ○表現しようとする内容や方法を吟味し、全体の構成を考えながら自分たちの思いやテーマを表現するミュージカルを創造する。

図1 「かかわる力」「ささえる力」「あらわす力」の3つの指標⁽¹⁵⁾

4 プロのダンサーによるワークショップと講演を通じて

4.1 プロのダンサーからダンスと生き方を学ぶ

ニューヨーク在住のダンサー・振付家である中澤利彦氏は、現在話題を集める観光型パフォーマンス“Ride”²⁾に厳しいオーディションを経て日本人として初めてパフォーマーとして抜擢され、活躍を続けている。また、中澤氏は定期的に帰国し、日本の小・中学校をめぐって、ダンス指導やダンスを通じた生き方について語るなど、精力的に活動をしている。折しも中澤氏の来日スケジュールの中で、本稿の研究対象である2つの小学校、上越教育大学、上越教育大学附属中学校の全4会場でのダンスワークショップ及び講演会を企画、実施することができなかった。

本稿では特に、平成27年6月に実施した、上越附属小と兵庫附属小へのダンスワークショップ及び講演会に焦点をあて、実施後の児童への記述アンケートをもとにその結果への考察を試みた。

両小学校側からは、「キャリア教育」につながる講演内容が含んで欲しいとの意向を受けた。また、中澤氏からは、子どものダンスパフォーマンスの本番の上演に向けた、意識・意欲の向上につなげるためのメッセージをダイレ

クトに伝えたいため、ニューヨーク・アポロ劇場で優勝した映像とともにブーイングを受けて退場となったダンスパフォーマンスの映像を子どもの目の前で披露したいという意向が伝えられた。

上越附属に於いては、6月2日夕刻から、体育館での音響確認を含めた、本番に向けた入念な打ち合わせが実施された。当初は6年生のみの参加を予定していたが、5年生からの要望を受け、体育館に高学年5・6年生の2学年が合同でダンスワークショップと講演会を受ける運びとなった。

4. 2 ダンスワークショップと講演の日時

- 1) 日時 平成27年6月4日 午後14時開始 5・6年生を対象としたダンスワークショップ及び講演を併せて約1時間30分
6年1組による話し合い活動 約45分間
場所 上越教育大学附属小学校 体育館
対象 5年生2学級67名、及び6年生2学級64名（男子62名、女子69名）
- 2) 日時 平成27年6月25日 午前10時開始 6年生を対象としたダンスワークショップ及び講演を併せて約1時間30分
6年3組による話し合い活動 約45分間
場所 兵庫教育大学附属小学校 体育館
対象 6年生3学級99名（男子48名、女子51名）

3) 両小学校でのダンスワークショップ及び講演（共通）

ダンスワークショップでは、ダンスの基本的なステップ アップ・ダウン、ムーンウォークなどに取り組みした後、J-popのグループ、SEKAI NO OWARIによる楽曲“Dragon Night”を中澤氏による振り付けで踊った。

講演は、「ダンサーとして生きる -夢に向かって走り続ける-」と題し、キャリア教育にかかわる内容で行われた。

4. 3 ダンサーによる講演の概要

中澤氏の講演は次のような骨子で構成された。

- ・マイケルジャクソンなどを輩出した、ニューヨーク・アポロ劇場でのアマチュア・ナイトで何度も途中退場を余儀なくされた場面。その後諦めずにチャレンジを続け、全12回の出演において、2度の優勝を手にすることができた体験とその映像。
- ・テレビのアマチュアダンスコンテストで審査員に独自性を評価され、優勝に輝いた体験とその映像。
中澤氏はこれらの2つの場面の映像紹介によって、具体的に子どもたちに伝わる手法を工夫した。
- ・ダンスの実演を4分間行い、このわずか4分間の音楽編集へのこだわりや、わずかな時間のパフォーマンスに、実に1000回以上の練習を繰り返して練り上げた背景があること。
- ・衆にどう感じて欲しいのか？を自問自答した結果、楽しいと感じてもらい、独自のダンスを追及した。
- ・あまたのライバルの中で、テクニックで観客に上手、と思わすことは、自分には難しいと感じた。そこで、何で勝負するかを思考錯誤した。その結果、動きのおもしろさ、皆がまねできるダンスを探究し続け、現在のスタイルを確立した。

4. 4 上越附属小 アンケートの結果と考察

平成27年6月4日に中澤氏のパフォーマンスとお話及びダンスワークショップについての記述式アンケート調査を受講した子どもを対象に実施した。なお、上越教育大学附属小学校5年生2学級67名、及び6年生2学級64名（男子62名、女子69名）を対象者として実施した。

調査項目は、以下の通りである（表1）。加えて、アンケートの回答から抽出された感想を（表2）に示した。

表1 アンケート調査の内容項目

中澤さんのパフォーマンス・お話・ダンス体験について

- ① 中澤さんのダンスパフォーマンスを見て、どのようなことを感じたり、考えたりしましたか。
- ② 中澤さんのお話から、ダンスに向き合う「生き方」について、どのようなことを感じたり、考えたり、しましたか？
- ③ 中澤さんのお話から印象に残った「ことば」や「考え方」などをひとつ取り上げ、そのことばの考え方のどんなところに興味をもったのか、教えてください。
- ④ 今日の講演から、新しい発想や考え方など学んだことがありますか。もしあれば、教えてください。

表2 授業後に実施したアンケートの自由記述欄より抜粋（上越附属小）

質問項目①への主な回答

- ・これがニューヨークで踊っている人のダンスかと思った。
- ・私は新体操でダンスを習っています。なので、中澤さんみたいに踊ってみたいと思った。
- ・表現力がすごいなと感じた。
- ・同じ日本人としてすごいと思った。
- ・色々な組み合わせのダンスで不思議だと思った。
- ・体の柔らかさが奇妙で驚いた。
- ・自分の人生は、自分なりに決めていかないということがわかった。
- ・ダンスにより興味を持つことができ、自分自身も楽しむことができた。
- ・先生のパフォーマンスに対する発想が面白いと思った。
- ・自分の夢を信じて目標を成し遂げてすごいと思った。
- ・そうとう練習をしたダンスだと感じられた。
- ・細かいところを気をつけて踊っていてすごいと思った。
- ・色々な場所からのウェーブや体の柔らかさを使った技はすごいと思った。
- ・パフォーマンスを上手にするには、時間と努力と気持ちが大切なのだと思った。
- ・今先生がここにいるのは、ダンスというものに関心を持ち、険しい道を頑張って乗り越えた結果だと感じた。
- ・色々な音をつけて、自分流にダンスを創るところがすごいと思った。

質問項目②への主な回答

- ・挫折をしないで立ち直るところはすごいと思った。
- ・色々な生き方があるんだと思った。
- ・自分なりに生きていく生き方は良いと思った。
- ・18歳から始めて世界の舞台に立つ生き方はすごいと思った。
- ・好きなことだったら、短時間でも上達できるんだと思った。
- ・プロになるためには、たくさんの時間をかけることが必要だと感じた。
- ・人生で色々な経験を積んで、今の自分に辿りついていると思った。
- ・どんな時でもあきらめないで、前を向いて生きていきたい と思った。
- ・コンテストで優勝できるように、命がけで舞台上上がっていると思った。
- ・先生にとってのダンスはは努力の結晶だと思った。
- ・目標のものに向かって、自分のできる精一杯を出しきることだと考えた。
- ・一回何かが失敗しても、必ず違う何かは成功すると思った。

質問項目③への主な回答（「 」内が子どもが選んだことば）

- ・「絶対にあきらめない」考え方は、何度も挑戦することが大切だと思った。
- ・「何でも挑戦することが大事」のことばで、何度も挑戦すると必ず成功すると思った。
- ・「プーイングを受けてもあきらめない」のことばは、次のステージで成長するために必要だと思った。
- ・「ダンスで人を幸せにする」考え方は、あきらめない意識があるからだと思った。
- ・「1年を通して短い曲を作る」のは、ダンスが本当に好きな人なんだと思った。
- ・「辛いことがあっても、立ち直って、自分にできることをすぐ考える」のことばはすごいと思った。
- ・「プーイングを受けた」の話は、自分のことを振り返っているので良いと思った。
- ・「ダンスコンテストで2回優勝した」話は、あきらめないでいけば大きな結果を生み出すことがわかった。
- ・「失敗しても、次はどのようにすれば上手くいくか」の挑戦する大切さに興味を持った。
- ・「好きなことを見つけたり、夢中になる」考え方は、自分の表情を変えるものになると思った。

- ・「1年間頑張って3分5秒の世界」のことばは、その3分5秒にすごい気持ちが入っていると思った。
- ・「バスケットを辞め、ダンスに出会った」話は、常に何かを探している心が大切だと思った。
- ・「続けていけば一つの形になる」ということばで、そのことについて深く知ることが夢につながると思った。
- ・「ブーイングが出てそれが楽しみ」ということばは、ダンスの世界の厳しさを感じた。
- ・「生き方」ということばの視点の付け所に興味を持った。

質問項目④への主な回答

- ・中澤さんのような生き方を実行できるか心配である。
- ・自分の好きなことで生き方を貫くのも良いと思った。
- ・ダンスが下手でも楽しめば上手く見えることがわかった。
- ・今回教わったダンスの他にも、たくさんの振り付けをやってみたいと思った。
- ・自分のことを責めるだけでなく、次どうしたら良いか考えることが大切だと思った。
- ・1回の失敗では挫けてはいけないことがわかった。
- ・あきらめず、努力すれば結果はついてくることがわかった。
- ・今からでも好きなことややりたいことを見つけて仕事につなげていきたいと思った。
- ・自分のできることからコツコツ取り組んでいこうと思った。
- ・自分で最初からダンスを創ってみるのも、自分の将来への力になると思った。
- ・夢を叶えるためには、色々な努力をしないといけないと思った。
- ・自分も好きなこと、得意なことに集中し、積極的に取り組みたいと思った。
- ・ダンスに向き合う生き方は、ダンス以外でも役立つ考え方だと思った。

このアンケート調査の回答から読み取れるように、項目①においては、学習者のダンスパフォーマンスの経験を振り返りながら、一流ダンサーのパフォーマンスを目の当たりにすることによって新たな価値観の転換が垣間見られた。

自由記述欄を見ると、「色々な場所からのウェーブや体の柔らかさを使った技はすごいと思った」、「パフォーマンスを上手にするには、時間と努力と気持ちが必要なのだと思った」との回答が見られたことから、本物の表現に触れる経験により、今後のダンスパフォーマンスに対する内的動機付けを強化し、活動全体の発展に寄与するものとして捉えられる。

その一方で、項目②のダンスに向き合う「生き方」についての問いや、項目③の印象にのこった「言葉」や「考え方」の問いに着目すると、ダンサー自身のダンスパフォーマンスに真摯に取り組む姿勢が大きな共感を生んでいた。

これは、自由記述欄に寄せられた回答の「プロになるためには、たくさんの時間をかけることが必要だと感じた」、「『絶対にあきらめない』考え方は、何度も挑戦することが大切だと思った。」から読み取れるように、ダンスパフォーマンスの本場で研鑽を積んだ体験談を聞くことによって、学習者のキャリア形成に大きな影響を与えているといえよう。

さらに、項目④の新しい発想や考え方など学んだことについての問いでは、項目②、③の内容を踏まえ、本時で得られた学びを今後のキャリア形成に反映しようとする回答を多く得ることができている。それは自由記述欄を見ると、「自分で最初からダンスを創ってみるのも、自分の将来への力になると思った」、「ダンスに向き合う生き方は、ダンス以外でも役立つ考え方だと思った」との回答が見られたように、ダンスパフォーマンスで得られた経験を日常生活の中に反映しようとする強い意志があったとともに、ゲストティーチャーの生き方に焦点を当てることは、自己の将来を設計し、その実現に向けて取り組もうとするキャリア教育の視点からも重要であることが一層明らかになった。

4. 5 兵庫附属小 アンケートの結果と考察

平成27年6月25日に中澤氏のパフォーマンスとお話及びダンス体験についての記述式アンケート調査を受講した子どもを対象に実施した。本実践の一環として実施した、自由記述による感想文が示すように、授業内容についての感想、授業全体に係る感想、そして、本時の学びを実践力へと昇華させた今後の学習方針を示した感想の3つの内容に分類された。なお、兵庫教育大学附属小学校6年生3学級、計99名を対象者とした。

以下、感想カードの記述から抽出された感想を示す(表3)。

表3 授業後に実施した自由記述の感想文より抜粋（兵庫附属小）

<p>〈授業内容についての感想〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダンスは1つだけの動きでは格好良くないと思っていたが、アップやダウンを加えると、格好良い振り付けになったので驚いた。 ・私はダンスを4歳から習っていたが、基礎の動作ができなかった。授業でもう一度基礎を学んだことが嬉しかった。 ・早く踊ったり、遅く踊ったりと振りを大きく表現をしていて凄かった。 ・今回の授業で大きな振りだけではなく、逆に細かな表現があることがわかった。 ・ダンスの基礎を学んでみて、ダンスは自分をより大きく見せたり、リズムをつかむことが大切だと思った。 ・リズムのとりやすい曲が選ばれていて、踊るときにもリズムがとりやすかった。 ・一つ一つの単純な動きにも、アレンジを加えるだけで、自分たちにも格好良いダンスが踊れることがわかった。 <p>〈授業全体に係る感想〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回の授業で「伝えること」を学んだ。「その時のお客さんに、何を伝えたいか」ということを考え、「そのためにどうするか」を考えることが大切であった。 ・今回の授業で「しっかり練習すれば何事でもなしとげることができる」ということを学ぶことができた。 ・今回の授業で堂々と踊ることを大切にしたいと思った。 ・中澤先生から「最初からあきらめてはいけない。まずチャレンジすることが大切」ということを学んだ。 <p>〈今後の学習方針を示した感想〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・下級生にミュージカルのフィナーレを教えるときは、全員が覚えやすい工夫をすると良いことがわかった。 ・3～5年生にフィナーレを教えるときには、まず自分が楽しんで教えたい。それは、自分が楽しんでいたら、見ている人も楽しい気持ちになれると思うからだ。 ・今回の授業で、諦めずに挑戦すれば、結果はついてくることがわかった。 ・これからミュージカルの練習が始まるので、この学びを生かしていきたい。
--

表3からも明らかなように、授業後に集約された感想カードからは、本授業で得られた知見を基に学習者の実体験と照らし合わせる記述が見られた。今後の学習方針を示した感想の、「下級生にミュージカルのフィナーレを教えるときは、全員が覚えやすい工夫をすると良いことがわかった」、「これからミュージカルの練習が始まるので、この学びを生かしていきたい」という感想に着目すると、ダンス指導の経験において個人差は見られるものの、多くの子どもが授業の有効性を記述しているとともに、今後開催される「うれしのカーニバル」を視野に入れていることから、この授業の成果が認められるものとして捉えられる。

加えて、多くの子どもの記述に見られた、「ダンスの基礎を学んでみて、ダンスは自分をより大きく見せたり、リズムをつかむことが大切だと思った」、「一つ一つの単純な動きにも、アレンジを加えるだけで、自分たちにも格好良いダンスが踊れることがわかった」といった感想にから、世界的な舞台で活躍するダンサーの講演を聴く経験は、子ども一人ひとりの身体表現活動に対する興味関心を喚起させ、これまでの既習事項や既有経験の結び付きを強めることにもつながったものと受け止められる。

4. 6 総括

受講した児童へのアンケート調査から、卓越した技能をもつ授業協力者のダンス指導や経験談を経て、技能を高めるための努力や工夫、メッセージの伝え方、パフォーマンスの創り方、さらには仲間とのかかわり方や生き方についてなど、表現にかかわる視座にとどまらない、幅広い気付きを得ていることが明らかとなった。

また、これらの記述以外に、子どもの話合い活動の中から出された意見にも、さまざまな学びの広がりが見られた。表現活動を媒介とした交流を通して、自分と仲間とのかかわりを意識し、積極的に関係をもとうとする態度を育んだり、目標を達成した後は次のより高い目標に向かって努力を続けたい、といった新たな価値観を築いていく子どもの意欲が記述にも表されていた。これらディスカッションから得られた子どもの感想や、本稿で扱うことができなかった両小学校における各々の表現活動の詳細についても続稿において展開し、その成果と課題についてさらに考察を深めていきたい。

冒頭にも触れたように、教科再編統合が進められる国際的な潮流の中で、独立した教科としての音楽科を維持していくための模索は差し迫った課題であり、2015年10月、日本音楽教育学会の最新の宮崎（全国）大会においても重要課題として活発な討議がなされた。プロジェクト研究「学会から社会への発信（第1年次）－教科音楽によって培われる力とは－」、あるいは、ラウンドテーブル「音楽科は存在できるのか？－文部科学省教科調査官を招いて今後の音楽科教育の展望を考える－」において、いずれも現状を打破するためのさまざまな提案がパネリスト及びフロアか

ら出された。本稿の実践がめざす方向でもある、他教科・領域とかかわった学習の推進も前者のラウンドテーブルの中で取り上げられ、音楽を接点として他教科・領域とつながる、あるいは他の芸術諸領域である図工等との連携が今後ますます推進されなければならないことが示唆された。

本稿で取り組んだ試行的な実践は、研究対象校の2校のうち1校が、音楽集会における創作ダンス、もう1校が創作ミュージカルという、各々の小学校において伝統的に取り組んできた素地があったゆえにこそ、ダンスという身体表現活動によって子どもに、より多くの気付きがもたらされたのではないかと考えられる。

表現を磨き上げて行く過程で音楽を何回も聴き込み、音楽にマッチした動きを探究していく。その過程そのものにおいて、何度も音楽を繰り返し聴き、音楽の世界を全身で再現する工程を仲間と共に創造することは、歌唱や楽器の演奏活動では培われ得ない学びから、確実に音楽理解を深めていることがアンケート調査からも明らかとなった。加えて、現代的なリズムに日常から慣れ親しんで育っている子どもにとって、ダンスははかり知れない魅力ある活動であることがパフォーマンスからも見て取れた。

本稿での上越教育大学附属小学校に目を向けるならば、学級担任が体育科を専門としていることから、その専門性を生かした身体的な技能面での的確な支援が可能であったことが子どもの活動展開をより推進することにつながった。我が国の初等音楽に携わる教員のおよそ7割は音楽を専門的に習得していない教員によって担われているという現状からも、今後は学級担任の得意とする分野からの多彩な切り口によって、表現活動の展開の支援に活かされていくことは重要であり、またその成果が期待されよう。

本稿の取り組みからも、表現教育に携わる教員の視野の拡大が、結果として音楽の学びを豊かにするという視点で、さらなる表現活動の実践が模索されていかなければならないだろう。同様に各学校の特色、地域性などを生かした学校独自の表現活動が展開が望まれることは言うまでもない。そして、極めて限られた音楽科の時数を他の表現活動の機会とつなげて子どもの感性を培う機会として捉え、展開していくことが重要であろう。そうした発想によって、幅広い表現活動に取り組むチャンスが広がり、子どもの汎用的な力が培われることが期待でき、ひいては音楽表現に資する力も培われるものと筆者らは捉えている。そしてこれらを検証すべく、続稿においても引き続き論考を深めていくものである。

謝 辞

本稿の調査研究にあたり、上越教育大学附属小学校5・6年生担任の先生方、兵庫教育附属小学校の藤原典英先生始め、6年生担任の先生方、総合研究部の先生方にご協力をいただきました。皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 『Eダンスアカデミー』は、NHK教育テレビジョン（NHK Eテレ）で2013年から年度前期に放送されているダンス教養番組。派生番組として『EXダンス体操』や『Eダンスアカデミー・選』がある。
- 2) “Ride”は観光バスに乗車しながら、ニューヨーク市の街角でさまざまなパフォーマンスを鑑賞する、新しいスタイルのエンターテインメントであり、現在も人気を博している。

引用文献

- (1) 奥忍 (2012) 「芸術関連諸教科の統合アプローチの健闘 - ドイツと台湾の例を参照しながら -」日本音楽教育学会, 日本音楽教育学会 第43回大会プログラム冊子 p.106.
- (2) Noriko Tokie (2014) “The Various Abilities Cultivated by Integrated Music Activities: Their Connection to Other Subjects in Elementary and Junior High Schools” ISME 2014 Brazil, Proceedings of the International Society for Music Education, 31st World Conference on Music Education, pp.349-355.
- (3) Yoshiko Endo, Masaji Kami, Noriko Tokie (2010) “Using Cross-Curricular Classes to Help Meet the Mandated Goals of Japanese Music Classes” ISME 2010 China, Proceedings of the International Society for Music Education, 29th World Conference on Music Education, pp.203-206.
- (4) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 体育編』東洋館出版社 pp.74-76.
- (5) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』東洋館出版社 pp.116-131.
- (6) 文部科学省 (2009) 『高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編』東洋館出版社 pp.81-87.

- (7) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』東洋館出版社 p.130.
- (8) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 p.70.
- (9) 時得紀子・湯澤卓 (2014) 「初等教育における総合表現活動をめぐるとの考察 - 上越教育大学附属小学校「音楽集会」の実践から - 上越教育大学研究紀要 Vol.34, pp.283-295.
- (10) 金子謙太郎 (2015) 「実践体育科 活動案 ストリートダンス 5. 本時のねらい」
- (11) 金子謙太郎 (2015) 「6年1組 創造活動 ストリートアスリート 年間活動構想図 実践教科活動との関連」
- (12) 兵庫教育大学附属小学校 (2015) 「うれしの活動について」兵庫教育大学附属小学校 総合活動部 2015.4.17作成資料
- (13) 時得紀子 (1999) 「生きる力を育てる音楽劇」『音楽劇 生きる力を育てる指導法』教育音楽 小学版 6月号別冊 pp.11-17.
- (14) 兵庫教育大学附属小学校 (2015) 「ミュージカルをつくろう」活動計画 兵庫教育大学附属小学校総合活動 2015.4.17作成資料
- (15) ibid.

参考文献

- ① 上越教育大学学校教育学部附属小学校 (1981) 『わが校八十年の教育史』東京法令出版株式会社
- ② 上越教育大学学校教育学部附属小学校 (2002) 『Curriculum2002-学びが生成するカリキュラム-』上越教育大学学校教育学部附属小学校
- ③ 時得紀子 (2002) 「総合的な学習における音楽科のかかわり」日本学校音楽教育実践学会編「音楽科と他教科のかかわり」東京：音楽之友社. pp.19-23.
- ④ 兵庫教育大学附属小学校 (2007) 『「学ぶこと」と「教えること」の共鳴 (2年次)』p.182.
- ⑤ 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編 平成20年8月』東京：教育芸術社.
- ⑥ 遠藤好子・上雅次 (2009) 「再編教科 表現創造科における取組」時得紀子 編著『総合表現活動の理論と実践』教育芸術社, pp.63-66.
- ⑦ 兵庫教育大学附属小学校 (2011) 『提案要項・学習指導案集「自己を形づくる」学校の構築 (2年次)』pp.19-20.
- ⑧ 上越教育大学附属小学校 (2015) 『今を生き明日をつくる子どもが育つ学校研究紀要Vol.4』上越教育大学附属小学校

付 記

- * 本稿は、科学研究費補助金 基盤研究(C) (課題番号：25381176, 研究代表者：時得紀子) の助成を受けた。
- * 本稿は、兵庫教育大学連合大学院共同研究プロジェクトQ 「芸術表現教育におけるコンピテンシー育成のためのプログラム開発に関する研究」(プロジェクトリーダー：時得紀子) の助成を受けた。

Observations of Physical Expression Activities in Elementary School Education

– Based on Practical Experience in Joetsu and Hyogo Education Universities –

Noriko TOKIE* · Kentaro KANEKO** · Yukichi IIMURA***

ABSTRACT

Since 1979, the Elementary School Attached to Joetsu University of Education has had an annual All-School Music Assembly as part of its efforts to foster relations between the different school grades. This research is focused on the “Feel the Music Through Your Body ~Street Dancing~” unit activities tackled by the 6th-grade class 6-1 after their five years of experience with expression activities through this traditional school event. Meanwhile, the Elementary School Attached to Hyogo University of Teacher Education has produced an annual student-created Musical, which will have its twentieth anniversary this September. This research focuses on the efforts of the 6th-grade students to prepare their costumes and choreography, including the message they want to deliver, for the real performance in the Fall.

Both schools also welcomed a professional New York dancer to participate in a dance workshop and give a career education lecture. Students filled out a questionnaire about their experiences there, the results of which showed that the students had received a great deal of wisdom from the dancer on a wide range of subjects. These were not limited merely to expression, but included such topics as: the effort and techniques required to hone skills; how to get a message across; how to create a performance; ways to better relate to one’s friends; and how to live well.

* Music, Fine Arts and Physical Education ** Attached Elementary School of Joetsu University of Education
*** Joetsu University of Education (Master’s Program)